アルテス　リベラレス　（岩手大学人文社会科学部紀要）
第97号　2016年１月　29頁～42頁

東北地方若年層の用いる文末形式「～クナイ」について

盛　田　紗緒莉*
小　島　聡　子**

１．はじめに

一般に，大学は高校よりは広い地域から学生が集まっている。そのため，大学入学後異なる言語圏の出身者と話す機会が増え，言葉の地域差のヴァリエーションに興味を持つ学生は少なくない。岩手大学の学生は，東北地方出身者が８割以上を占め，中でも半数近くは岩手県の出身[1)]なので，首都圏の大学に比べれば，言語のヴァリエーションは少ないかもしれない。しかし，東北地方の面積は広大で内部の言葉の地域差は小さくなく，岩手大学の学生たちも，大学進学後に言葉の違いに気がつくことがあるのは他の大学の学生と同じである。

とはいえ，岩手大学の学生たちが大学で必ずしも「地元の言葉」で話しているというわけではない。近年は「方言ブーム」などもあって，方言に対する劣等感は減っているという指摘もあるが，東北地方では未だに方言に対するコンプレックスは根強く，学生たちも例外ではない。そのため，「地元の言葉」は出さないようにしている学生も少なくない。また，特に盛岡市など都市部出身の学生たちは，自身の言葉を「標準語である」と意識しているか，あるいは少なくとも「あまりなまっていない」と思っていることが多い。つまり，お互いに「標準語」で話していると思っている学生が多いのである。それにもかかわらず，通じない言葉があり，それが地域差によるものであると発見すると，一段と興味をそそられることも多いようである。

本研究では，そのような「標準語」的な表現の中で一部の学生たちが用いている「あるくない？」「するくない？」などと使う「クナイ」という形に注目し，東北地方における地域的な広がりと使用状況を明らかにしようとするものである。

「あるくない？」は動詞「ある」に「クナイ」という形式が付いた形で，「あるよね？」あるいは「あるんじゃない？」と同じような意味を持つ表現として用いられる。岩手大学では，主として秋田出身の学生が多く発話していることが観察される。しかし，岩手大学でも使用しない学生の方が多く，初めて聞いて驚く人も少なくない。一方，「あるクナイ」を使用する人は，相手に驚かれて初めて通じない場合があると気が付くようである。この形は，秋田県のいわゆる伝統的な方言の範疇に入るような表現ではなく，使っている人にも方言であるという意識は

---

*　岩手大学人文社会科学部国際文化課程，平成26年度卒業生。なお，本稿は盛田が特別研究（卒業論文）として行った調査研究を元に，小島が加筆したものである。
**　岩手大学人文社会科学部　satok@iwate-u.ac.jp
１）岩手大学の概要に公表されている出身高校の所在地別割合による。

ない。

そこで，本稿では，「あるくない」のような〈動詞＋クナイ〉という形式が，どのような地域的な広がりを持ち，また，どのように用いられているのかについて，岩手大学の学生を対象に東北地方における実態を調査した。

その結果，秋田県では地域的にも広く用いられ，また，待遇的にも敬体で用いられることもあるなど，用法も広いことが明らかになった。さらに，周辺への広がりという点では，秋田県の南側に接する山形県では同様に用いられている可能性があるが，岩手県・青森県・宮城県・福島県ではほぼ用いられることがないことがわかった。

2．先行研究について

本稿で取り上げる〈動詞＋クナイ〉という形式については，既にいくつかの先行研究で取り上げられている（平塚2009，高木2009など）

それによれば，地域的な広がりについては，使用者は関西地方及び福岡市の若年層に多く，首都圏では見られないとされている。[2)]

また，意味・用法の面では，同意要求の形式として特化しており，「ない」という打消しの形式を含むが，単なる否定の文や否定疑問文としては用いられないことが指摘されている。さらに，形式の広がりとしては，「クナイ」の「ナイ」の部分を活用させた「クナカッタ」・「クナイデスカ」の形や，「クナイ」に前接するのがスル形以外の形式である場合，他の名詞・形容詞などの品詞の場合があることが指摘されている。ただし，「動詞スル形＋クナイ」以外の形式については，用例の存在を示すにとどまっている。少なくとも2009年の時点では，関西地方・福岡市において，「動詞スル形＋クナイ」以外の形式の使用頻度は高くない様子がうかがわれる。

一方，これらの形の成立について，平塚2009・高木2009ともに，対象とした地域における，否定形式「ん（へん）」の存在が関与していると説明されている。それによれば，まず，元来否定に「ん（へん）」という形を用いていた地域において，東京方言の「～なくない」に対応して「～んくない（へんくない）」という二重否定形式が成立する。そこでさらに，例えば「できる」で考えれば否定「できん」⇔肯定「できる」という対立があることを背景として，「できん・くない」に対立して「できん」を「できる」にした「できるくない」という形が出現するというのである。特に，平塚2009は，「クナイ（カ）を使用する方言は，否定辞ン（ヘン）を用いた〈動詞否定形＋クナイ（カ）〉というネオ方言を必然的に持っているのではないかと推測することもできる」としている。

さて，東北地方出身の学生たちにみられる「くない」について，意味・用法は，関西地方のそれと同じく同意要求であるといってよさそうであるが，具体的な形式の広がりは，「クナイデスカ」や「クナカッタ」等も含め少し広いようである。また，形式の発生に関連して，少なくとも「クナイ」をよく用いる秋田県において，方言の否定の形式は主として「ネァ」であっ

2）しかしながら，近年は首都圏でも用いる場合があるようである。例えば，2015年に所謂「ドローン少年」が騒動になったが，その少年が善光寺で撮影したとされる映像の中で，ドローンが落下した際に「落っこったくね？」と言っていた。この少年は報道によれば，神奈川県在住である。使用地域が広がりつつある可能性がある。

て[3]，「ン」はないため，平塚2009・高木2009に見られるような説明は適用できない。平塚2009では，関西方言や福岡市方言からの伝播によって，「デキンクナイ」がない地域でも「クナイ」が使用される可能性が指摘されてはいる。しかし，本稿での調査によれば，秋田県南部では少なくとも10年以上前つまり2005年前後にはある程度使われていた[4]ようで，関西方言からの伝播であるとは考えにくい。

東北地方における「クナイ」の形式の成立については，後述するが，秋田方言における形容詞の形態と関連している[5]と考えられる。

ただし，本稿では，形式の成立については深くは立ち入らず，形式の広がりと使用地域の広がりについて指摘するにとどめる。

３．調査の概要

３.１．調査対象について

調査は，東北地方各県出身で盛岡市在住の大学生及び大学院生[6]を対象とし，調査者が協力者に直接対面し聞き取るという方式で行った。

調査対象者は，出身県ごとに一定人数を確保した。特に，調査前の自然傍受で発話していた人がすべて秋田県であったことから，秋田県出身者は，人数を増やし重点的に調査した。また，比較のため秋田県以外の東北各県出身者を調査したが，秋田県以外出身者全体の人数が秋田県出身者と同じになるようにし比較の便宜をはかった。

また，男女差の有無を確認するため，男女は同数になるようにした。

具体的には，秋田県出身者の男女10名ずつ計20名，秋田県以外の東北5県（青森県・岩手県・宮城県・山形県・福島県）出身者については各県男女２名ずつ，計20名，総計40名である。調査対象者の年齢は18歳～25歳である。

３.２．調査項目について

調査に先立って，用法の広がりを見るため，アメーバブログ及びツイッターで「クナイ」の例を検索したところ，高木2009では稀とされている「クナイ」と名詞・形容動詞語幹・形容詞基本形と共起する例が一定数みられた。さらに，動詞に付く場合でも，スル形だけでなく，タ形・テイタ形・テイル形につく例もあり，また「クナイ」そのものの丁寧体「クナイデスカ」という例もみられた。

そこで，本調査では，これらを踏まえ次のような観点で調査することにした。

○「クナイ」に上接する語の範囲について
　・動詞以外の品詞につくのかどうか
　・「スル」形以外（タ形・テイル形・テイタ形）につくのかどうか

３）秋田県教育委員会編（2000）pp..111-112
４）2014年時点の大学生が小学生のころから周囲も含め使っていたという回答が得られている。
５）この点については竹田晃子氏よりご教示いただいた。なお，形容詞の形態については，秋田県教育委員会編（2000）p.81。
６）秋田県出身者については一部盛岡大学の学生を含むが，あとは岩手大学の学生である。

・動詞でも語によって付きやすさに差があるのかどうか
○「クナイ」自体の語形変化と用法の広がり
・「タ」形になるかどうか
・丁寧体など敬語になるかどうか
・否定形として「クナイ」を用いるかどうか

上記の観点を調査するため，調査項目として次のような句を設定した。

○前接語句
・動詞
スル形：ある/する/使う/食べる/走る/確かめる/言う/泣く/渡す
シタ形：あった/した/使った/食べた/走った/確かめた/言った/泣いた/渡した/頑張った
シテイタ形：してた/使ってた/食べてた/走ってた/確かめてた/言ってた/泣いてた/渡してた
シテイル形：してる/使ってる/食べてる/走ってる/確かめてる/言ってる/泣いてる/渡してる
・名詞：車/雷
・形容動詞：暇/静か/イケメン
・形容詞：いい/眠い/難しい
○「クナイ」について
・クナイデスカ：ある/する/使う/食べる/走る/確かめる/言う/泣く/渡す
・クナカッタ：ある/車/静か/眠い
・クナイを否定形として用いるかどうか：ある/する/車/静か/眠い

動詞については，基本的に同じ語について各形態を調査したが，「ある」については，シテイタ形・シテイル形はないので抜かしてある。また，シタ形についてのみ周辺で「クナイ」を使用する人が「がんばったクナイ」を頻繁に用いていたため項目に入れてみた。ただし，事前の予備調査で各種SNSを調査したところ「がんばる」「がんばっている」「がんばっていた」などの形態では「クナイ」をつけた例が無かったため，割愛した。

また，「クナイ」の形態については，「クナイデスカ」の形は比較的よく用いるようなので，動詞のスル形として聞いた形全てについて調査したが，「クナカッタ」と否定形として用いるかどうかについては，各品詞の代表例について調査した。

４．調査結果の概観―秋田県と秋田県以外の５県の比較

４.１．スル形＋クナイ

調査では，前述の形式について使用の有無を確認した。初めに句を示し，使う場合は「○」，使わないが聞いたことがある場合は「△」，聞いたこともない場合は「×」で答えてもらった。そのうえで，「△」と「×」と答えた人には，文脈・シチュエーションを提示し，それによって回答が変わった場合は，後の回答を用いて考察した。

さらに，意識調査として，「クナイ」を用いた表現を使う人と使わない人に，それぞれ「クナイ」に対する印象や許容度についても尋ねた。

まず各品詞及びクナイの語形ごとの結果をグラフ（図１）で示す。秋田県とそれ以外の５県

の結果をそれぞれ一つのグラフにまとめている。

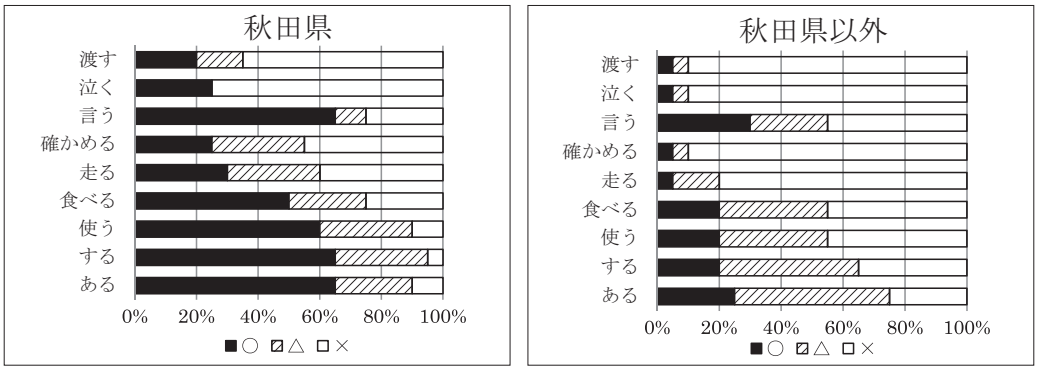

図１　スル形＋クナイ

動詞のスル形に付いた形を用いるかどうかを調べた結果，図１のように，秋田県と秋田県以外では使用するかどうか，認知しているかどうかで大きな差が出た。

特に秋田県では「あるくない」「するくない」についてはほとんどの人が聞いたことがあり，半数以上の人が自分でも使用すると答えている。しかし，秋田県以外の５県では，△と×で８割近くを占め，殆どの人が自分では使用しないと回答している。なお，秋田県以外の5県出身者のうち「使用する」と答えた人の内訳は，「言うクナイ」について岩手県１名，宮城県１名，「あるクナイ」について宮城県１名があった以外は，全ては山形県出身者であった。今回の調査では，山形県を他の４県と同様に扱ったが，山形県が秋田県と隣接していることを考えると，秋田県から山形県にわたって「クナイ」が広がっている可能性が高く，秋田県と同様に扱ってもう少し多くの人を対象とした詳細な調査をする必要があるかもしれない。一方山形県と岩手県とは県境が接しておらず，山形・岩手間の交通の便もやや不便なため，岩手大学の学生の中では秋田県出身者に比べると山形県出身者は少ない印象がある。秋田県出身者の方が絶対数が多いため，岩手大学での「クナイ」使用者も秋田県出身者の方が多く感じられた可能性がある。

次に，上接語による違いという点に注目する。

平塚2009では，例えば「食べる」については「食べれる」という可能形とともに調査し，その結果，可能形の方が容認度が高いことから，状態性の語の方がこの形式を取りやすいとしている。今回は，可能形についての調査は行わなかったが，しかし，容認度の点でみると，状態性の語である「ある」は確かに容認度が高いものの，一方で「する」「食べる」「言う」などの必ずしも状態性の語とはいえないものとの間に大きな差は見られない。したがって，秋田での用法において動詞の状態性は「くない」の形式を取るかどうかに関係しないと言えそうである。

さらに，今回の調査で最も容認度が低かった「泣く」については，「クナイ」をつけると「ナククナイ」と「ク」が連続して言いづらい」という回答があった。また「確かめる」についても「長くていいにくい」という回答もあった。新しい俗語的な表現だけに，「言いやすさ」が容認度に関係する可能性も考えられる。また，「渡す」「走る」については「普段の生活で使わない」という回答があり，状況の想定しにくさも容認度の低さにつながったようである。

なお，今回の調査で最も容認度が高かったのは「言うクナイ」で，「使うクナイ」も容認度

が高い。高木2009では，「語末が-ruで終わる動詞に続くものが多い」としているが，秋田県を中心とする東北地方の「クナイ」は，必ずしも前接動詞の語尾が「-ru」に偏るとは言えない。

4.2．シタ形・シテイル形・シテイタ形

次に動詞の形態によって使用に違いがあるかどうかを調査した結果を示す。図２は「シタ形」，図３は「シテイル形」，図４「シテイタ形」に付く場合である。

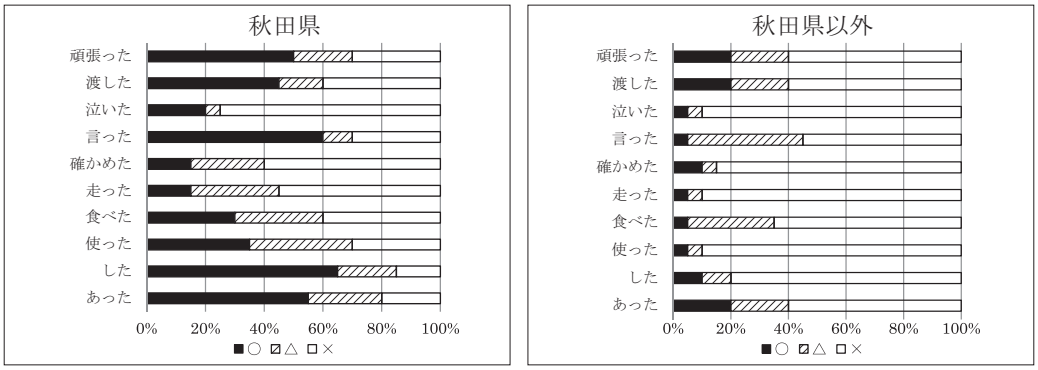

図２　シタ形＋クナイ

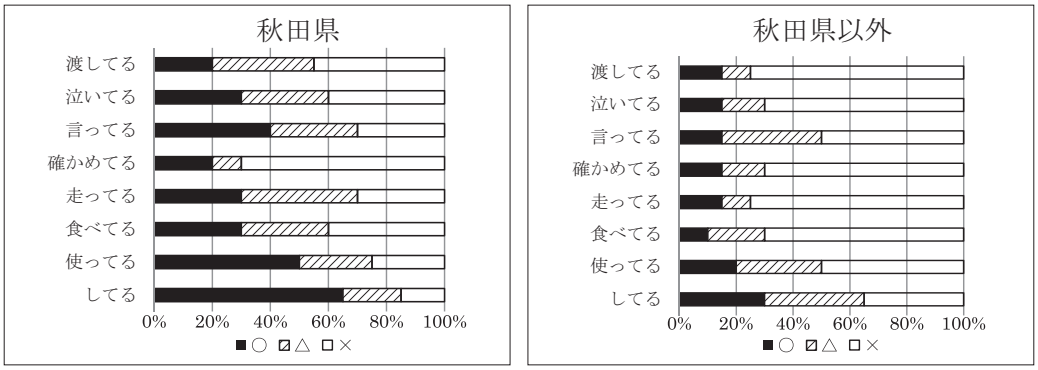

図３　シテイル形＋クナイ

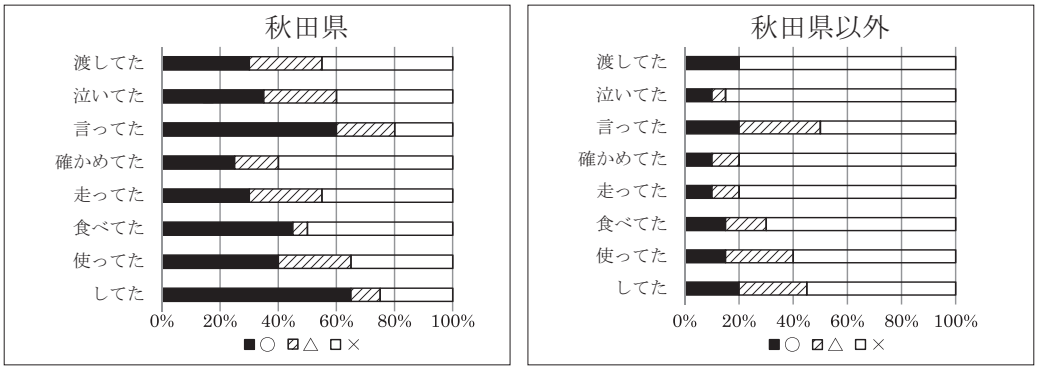

図４　シテイタ形＋クナイ

秋田県でもそれ以外の地域でも，スル形に付く形に比べると，「シタ形」「シテイル形」・「シテイタ」形のいずれもやや容認度は下がる。ただし，秋田県では全体として容認度が低いとまでは言えず，半数以上の使用者がある例も見られる（「した・あった・言った・頑張った」「してる」「してた・言ってた」など）。ここから，「スル形」以外にも使用が拡大しつつあることが推測される。

秋田県について３形式を比較すると，「シタ形」「シテイタ形」「シテイル形」の順に容認度が下がる。五段動詞以外の「タ形」に「クナイ」が付く場合について，高木2009では，希望の「タイ」の否定疑問形式との同音衝突が問題視されている。希望のタイとの同音衝突は今回の調査項目のうち「したクナイ」「食べたクナイ」「確かめたクナイ」及び「シテイタ形＋クナイ」全てにおいて起こるが，秋田県の状況を見る限り，あまりに問題にならないようである。確かに「確かめた」「食べた」の容認度は高くはないが，「したクナイ」は，秋田県では最も容認度が高い。これは，秋田県方言では「タイ」は「テァ」という形をとり，否定形は「テァクネァ」となるため，必ずしも衝突を起こすとは言い切れないことも関係している可能性が考えられる。

また，「泣く」については，他の語と異なり，他の形態にすることでスル形よりも容認度が上がっている。このことからもスル形の場合に「ク」が続いて言いにくいことが使用を妨げているという可能性は考えられる。

しかし一方，スル形及び形態変化した形を含めた全体を通じて，「言う」「する」という動詞の容認度が高い。これらの語は，同意要求として使われる状況を想起しやすい。容認度の高さには状況の想定しやすさが関係している可能性もある。今回の調査では，聞き取りの際に短文や状況の説明を個別にしているが，状況を限定した長めの文脈で調査することが必要かもしれない。

一方，秋田県以外の５県では，どの形態も使用率が非常に低い。しかも，いずれの場合も使用すると答えた人の殆どは山形県出身者であり，秋田・山形以外の４県では，殆ど使われていないといえそうである。

４.３．動詞以外の語

次に，名詞，形容動詞語幹，形容詞終止形に付くかどうかについての調査結果を示す。（図５）

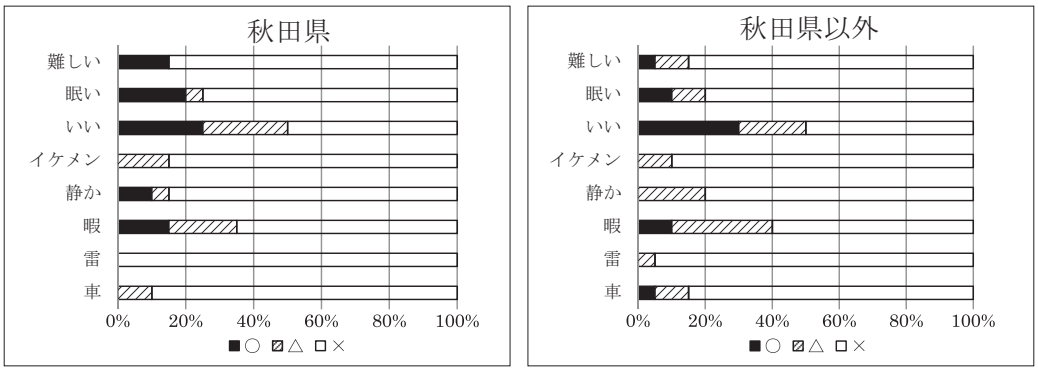

図５　名詞・形容動詞語幹・形容詞＋クナイ

全体として動詞以外のものに付く用法については，秋田県でも秋田県以外でも容認度は低い。詳細に見ると，秋田県では，形容詞終止形・形容動詞語幹は辛うじて容認されているが，

名詞は全く容認されず，品詞による違いが顕著である。一方秋田県以外では，総じて容認が低いものの名詞の場合も「○」の回答があるという点で異なる。

「名詞＋クナイ」については，秋田県出身者のほぼ全員が聞いたこともないと回答しており，その容認度の低さは，他の形態の容認度の高さと考え合わせても特異である。聞き取り調査の際も，秋田県出身者に名詞に付ける例について問うと，「意味が分からない」と言って笑い出すという反応を示す人が多かった。秋田県出身者にとって，「クナイ」が名詞に付くことは思いもよらない用法であり，「クナイ」が活用語に付く語尾であるという認識を明白に持っていると考えられる。この点，平塚2009では名詞に付く例がある可能性が指摘されており，関西・福岡とはやや異なる傾向を示す。

さらに，形容詞終止形のうち「いい」に付く場合に限っては秋田県以外と秋田県とで容認度が殆ど同じで，「○」の回答自体はむしろ秋田県以外の方がわずかに多くなっている。秋田県では「眠い」・「難しい」でも，「○」と回答した人が「よい」ほどではないにせよ，同程度にあるのに対し，秋田以外の地域では，「眠い」「難しい」に比べて「いい」の「○」の率が突出している。これについては，「イイ」の形態から生じる「イクナイ？」という形が，若年層で広く用いられていることが影響している可能性が考えられる。調査対象とした「いいクナイ」と「いくナイ」の差は「い」が長音かどうかで，そもそもあまり大きな違いではない上に，東北諸方言はシラビーム方言であるといわれており[7]，あまり方言を話さない学生の世代でも長音かどうかの差にあまり敏感でない人がいる可能性がある。そのため，「クナイ」の容認度が低い地域の人でも「いいクナイ」だけは「○」や「△」と回答してしまったものと思われる。従って「いいクナイ」については「クナイ」を容認する例には入れない方がよいかもしれない。

4.4．クナイの形態変化の例

次に，クナイの形態ごとの使用例についての調査結果を示す。

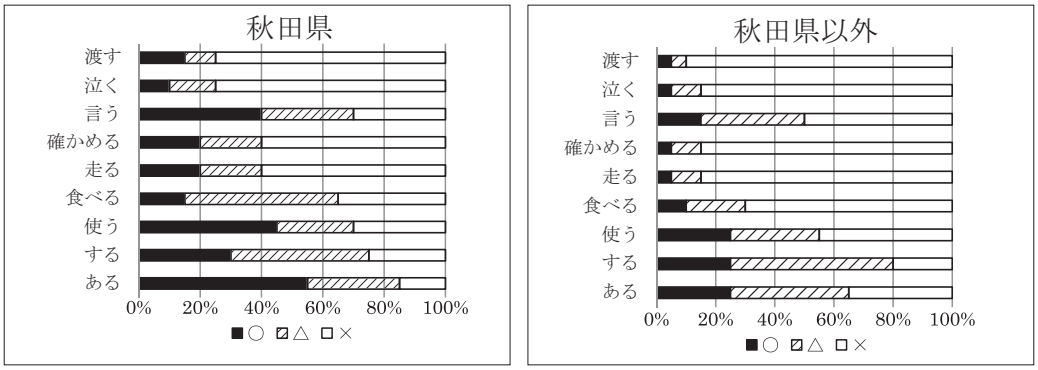

図６　スル形＋クナイデスカ

まず，敬体について，先の動詞のスル形の語例について，それぞれを敬体で用いるかどうかをたずねた。その結果，秋田県では，常体ほどではないが，敬体での使用もかなり容認されて

7）佐藤武義・前田富祺ら編（2014）『日本語大辞典』大修館書店　「シラビーム方言」（新田哲夫）の項など。

いる様子が確認された。回答者の中には，「丁寧形でなら学校の先生に対しても使用できる」とする人もあった。また，秋田県以外では容認度が低いが，一部「使用する」と回答しているのは他の例と同様山形県出身者である。

「クナイ」を使用する人は，「クナイデスカ」という敬体でも使用していることがうかがえ，「クナイデスカ」の使用がさらに拡大する可能性も考えられる。

次に，クナイ自体のタ形の使用については図７の通りである。

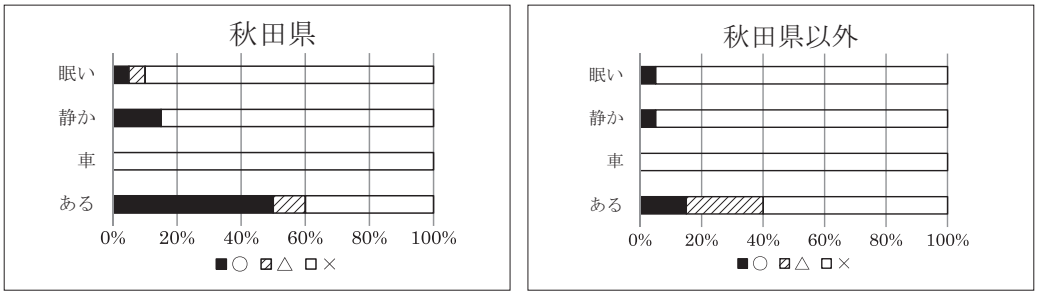

図７　クナカッタ

こちらは各品詞で代表的なもの一例ずつについて「クナカッタ」をつけるかどうかをたずねた。その結果，「クナイ」をよく使用する人（秋田県出身者と山形県出身者）は，動詞に付く例の「あるクナカッタ」も使用すると回答していることがわかる。しかし，動詞に比べて「クナイ」の容認度が低かった他の語に付く場合は，「クナカッタ」の容認度も低いことがわかる。「クナイ」の容認度が上がると「クナカッタ」も使えるようになる可能性が考えられる。

最後に，これらの語形を同意要求の疑問文形式ではなく，単純な否定の文として用いるかどうかを尋ねた。これに対しては，秋田県出身者1名が「するくない」を「○」とした以外は，ほぼ全ての人が「×」という回答であった。単純な否定の文としては用いられないという点では，関西地方での使用と共通する。

５．秋田県内部の詳細について

５.１．地域差・性差について

秋田県での「クナイ」の使用が広がっていることについては，今回聞き取り調査を行った人全員が，動詞・イ形容詞基本形・ナ形容詞語幹に接続する「クナイ」を使った文例の意味を説明するまでもなく理解できたことからも，明らかである。しかし，詳細に見ると，地域ごとあるいは性別によって，「クナイ」の容認度には違いが見られた。そこで，次に秋田県の中での結果について詳細に分析する。

今回調査した20人の秋田県内での出身地と人数・性別の内訳は以下の通りである。[8)]

８）秋田県を３地域に大別することについては，秋田県教育委員会2000などで，秋田県の地域区分として，県北部・中央部・県南部の３つに分けられていることに従ったものである。この３区分は方言の区分としても用いられる。

・県北部（４）　大館市（男１　女１），能代市（女２）
・中央部（５）　秋田市（男１　女２），男鹿市（男1），井川町（男1）
・県南部（11）　大仙市（男３），にかほ市（男１），湯沢市（女１），横手市（男１，女２），羽後町（男１，女２）

まず，地域差としては，県北部・中央部よりも県南部の方が容認度が高い。また性別で見ると女性の方が総じて容認度が高い。特に，中央部～県北部の男性は容認度が低かった。なお，「自分で使用する」と回答した人のうち，男性は，「クナイ」ではなく「クネ」あるいは「クネー」という形で用いることが多い。

表１　秋田県出身者の「あるクナイ」の容認度

	○		△		×	
男女別	男	女	男	女	男	女
北部・中央部	0	4	4	0	0	1
南部	4	5	1	0	1	0
計	4	9	5	0	1	1
	13		5		2	

表１は，最もよく使われる語形の一つである「あるクナイ」についての秋田県内の出身地域及び性別ごとの容認度を示したものである。全体としてみると，○（自分で使う）が多いのだが，県北部・中央部の男性は○とした人は１人もない。さらに県北部・中央部の男性のうち２人は，この語形について「大学入学後に聞いた」とし，秋田県内で聞いたことはないと回答している。

また，自分では使わないとする県北部・中央部出身の男性は，「クナイ」の印象について「女子が言っている感じ」「チャラい感じ」「不自然な感じ」と回答している。「クナイ」に対する違和感が強いことがうかがえる。

一方，県北部・中央部の女性は，殆どの人が自分で使用すると回答しており，容認度は男性より高い。しかし，印象については，「女子が言っている」「若者が使っているイメージ」「チャラい感じ」「ギャル語という印象」などのように，男性と同様の回答が見られ，使ってはいるものの新語・俗語という印象が強いことがうかがえる。ただし，中には「標準語だと思っていた」「丁寧形でなら学校の先生にも使えて，先生にその表現を注意されることもなかった」という回答もあり，県北部・中央部でも個人によって意識に差があることが分かった。

次に，県南部出身の男性では，多くの人が「自ら用いる」と回答しているが，一部，「自分では使わない」とする回答も見られる。ただ，「クナイ」の印象については，「男女問わず使っている印象」と答えており，県北部・中央部出身者とは異なり，「女子が多く使っている」という印象はないようである。また，「若者が使っている」という印象も抱いておらず，「学校の先生（50代くらい）も使っていた」「親世代でも使う人がいる気がする」という回答があった。

最後に，県南部出身の女性については，全員がこれらの形を自分で使うと回答している。また，「クナイ」の印象については，全員共通して「チャラい感じはしない」という回答であった。一方で，使用者の性別については意見が分かれ，「女子が言っている」とする人と「男女問わず使っている」とする人と両方見られた。同様に，年齢層についても「若者が使っている

印象がある」とする人と，そうではない人とが分かれている。さらに，「学校の先生に対しても使える」かどうかについても意見が分かれていた。

以上をまとめると，秋田県内部においては，県南部の方が使用率も高く，なじみの表現として違和感なく幅広く用いられていることがうかがえる。

５.２．秋田県の方言との関わり

今回の調査において，県南部の男性の中に，「祖父母が『眠いぐねが？（眠くないか？）』という風に使っているのをよく聞く」と指摘した人があった。確かに，一見「眠いぐねが？」は，「眠い＋クナイカ」という形式と考えられる。しかし，これは同意要求の表現ではなく，否定形式の真偽疑問文で，本稿で取り上げている若年層の用いる「クナイ」とは異なるものと考えた方がよい。

ここで，秋田県方言の形容詞の形態について触れておく。秋田県教育委員会2000（p.81）によれば，秋田方言の形容詞は次のような特徴があるという。

・秋田方言の形容詞は，語尾と前接母音とが融合した形が基本形（終止形）となる。
・この基本形（終止形）はこのままの形で語幹となり，様々な語尾を後接する。
・〈否定〉はク語尾に「ネァ」を後接して「クレァクネァ（暗くない）」

このことから，先の「眠いぐねが」は，「ネムイ」というより「ネミィ」に近い形である可能性が高く，そのク語尾形に否定形「ネァ」の短縮形態「ネ」を後接させ，さらに疑問文としたものであると推測される。したがって，「眠いぐねが」は純粋に秋田方言の否定の真偽疑問形式であって，大学生の祖父母世代にまで同意要求の「クナイ」がさかのぼれるというわけではないと考えた方がよい。

しかしながら，問題になるのは，今回の回答者である学生が「眠いぐねが」という方言形と今回の「クナイ」を同一の範疇と捉えていると思われるということである。今回の調査したのは方言語形ではないため，厳密には形は異なるものの，形の作り方に共通点がある以上，意味の違いと関わりなく同じ形式であると考えても不思議はない。とはいえ，秋田県出身者でも「形容詞終止形＋クナイ」の容認度はさほど高いわけではない。ちなみに，「眠いクナイ」について「○」と回答したのは，県北部の女性１名，中央部の女性１名，県南部の女性２名，計４名のみである。秋田県出身者の多くは，新しい「クナイ」と方言とを区別しているということかもしれない。しかし，改めて聞かれたことで混乱した部分もあったようで，聞き取り調査後の雑談中に，「寒くない？」「暗くない？」といった本来の形容詞の否定疑問文を口にしたところ，「これも秋田県特有なの？」と聞いてくる秋田県出身者が何人かいたという。「クナイ」の接続について，方言語形との関連から，標準語形についての認識も混乱をきたしているということであろう。

一方で，今回の調査で，県南部の男性の中には他にも，「クナイ」を使った表現を「『訛っている』と思っていた」と回答する人があった。このことは，秋田県教員委員会2000（p.81）にある次のような記述と関連すると思われる。

> 秋田方言では，形容詞の本来の活用語尾が基本形（終止形）に後接して用いられる。このことは，形容詞語尾の独立化を方向付けることとなったようである。秋田方言では，一般に「コノ　ワラシ　アルゲルグ　ナッタ（この子は歩けるようになった）」のように動詞にク語

尾を後接することが出来る。[9)]

また，特に県南部の一部地域では，「グ（ク）」を構成要素として含む「ガッタ」「ガロ」等の形が，動詞に付く例が見られるという。県南部由利地方[10)] の方言を調査した松丸2002によれば，確かに「ガロ」「ガッタ」が動詞に接続する例はあったが，一方で，「グ」だけが直接動詞に接続する例は見られなかったという。これについて，松丸2002では，動作動詞についてのみ調査したためで，状態的な意味を表す動詞なら「グ」が接続する可能性があるとしている。

今回の調査対象「クナイ」は，所謂伝統的な方言語形ではないので，この「グナル」とは直接は関係しない。しかし，秋田県には，形態として動詞に本来形容詞語尾である「ク」が付くことに違和感をもたない環境があるということは出来よう。そのことが，秋田県での「動詞＋クナイ」の容認度の高さにつながっているということは十分に考えられる。特に，県北部・中央部に比べ，由利地方を含む県南部[11)] の方が容認度が高いという点も示唆的である。

なお，今回の調査で秋田県出身者と同じく「クナイ」の容認度が高かった山形県について，山形県の方言は庄内・小国・最上・村山・置賜に区分されるが，特に秋田・由利方言は庄内方言と似ているとされる。方言として「ク」を動詞に接続させる特徴が，山形県にもあるとすると，「クナイ」の容認度が高いことには方言の影響が大きいと考えられる。

6．「違う＋クナイ」の語形について

最後に，「違う」と「クナイ」の関係について，触れておく。

「違う」は本来ワ行に活用する動詞だが，平叙文でも「ちがくない」「ちがくて」「ちがかった」というような形容詞型に活用させて用いられる場合があることが知られている（北本1995など）。岩手大学でも「ちがくない」などの形は，出身地に関係なくよく聞かれる。

一方，平塚2009によれば，関西地方でも福岡市でも「違うクナイか」は動詞に後接する「クナイ」の中では突出してよく用いられるという。

形式として，「ちがくない」という形は「ちがうくない」と近いが，「クナイ」の使用地域では，同意要求の場合どちらの形式を用いるのだろうか，また，他の地域ではどの形式を用いるのだろうか。

そこで，今回の調査では「違う」の否定形を用いた同意要求について，本来の動詞の活用形態の「チガワナイ」，形容詞型の「チガクナイ」，今回の調査対象形式である「チガウクナイ」の3形式のいずれを用いるかについて尋ねた。複数の形式を使う場合は，どのような頻度で用いるかも回答してもらった。

その結果を以下に列挙する。ナイは省略し，頻度の差は不等号で示し，「チガウク」には網掛けを施した。

9）なお，秋田方言のこのような「グナル」という形式の存在については，平塚2009でも，「クナイ」の前接語の状態性についての記述の中で触れられているが，秋田県で「クナイ」が使用されていることについては触れられていない。

10）県南部の中でも由利地方は，江戸時代の藩が秋田藩ではなかったことから方言の面では秋田県内の他の地域と異なる特徴を持つことが知られている。

11）ただし今回の調査対象者の中には由利地方出身者は含まれていない。

・チガワ・・・・・・・・・・・・1（秋田南部）
・チガワ＝チガク・・・・・・・2（岩手　福島[12]）
・チガワ＞チガク＞チガウク・・1（岩手）
・チガワ＞チガウク＞チガク・・1（秋田南部）
・チガク・・・・・・・・・・・15（青森　岩手　宮城　福島　秋田北部・中央・南部）
・チガク＞チガワ＞チガウク・・1（秋田中央＊）
・チガク＞チガウク・・・・・・10（岩手　山形　秋田北部・中央・南部）
・チガク＞チガウク＞チガワ・・1（秋田中央）
・チガウク・・・・・・・・・・6（青森　山形　秋田中央・南部）
・チガウク＞チガク・・・・・・1（秋田南部）
・チガウク＞チガク＞チガワ・・1（山形）

まず注目されるのは「チガクナイ」の容認度の高さである。「チガクナイ」が回答に含まれないのは７人だけで，うち６人は「チガウクナイ」しか回答しなかった人である。「チガワナイ」を少しでも使うと回答したのは40人中８人に過ぎない。特に同意要求の場合は，「チガワナイ」は使いにくいという可能性も考えられる。

一方，「チガウクナイ」を少しでも使うと回答したのは，40人中22人で過半数である。22人のうち秋田県・山形県以外の出身者は３人（下線を施した）で，あとは全て秋田県・山形県出身者である。このことから，「クナイ」の容認度が高い地域では，「違う」についても「チガウクナイ」という形を用いていることが分かる。但し，「チガク＞チガワ＞チガウク」と回答した秋田県出身者（＊）は，「チガウクナイ」については違和感があるとしている。

なお，秋田県出身者で「チガウクナイ」を使うとした人は20人中13人（65％）で，容認度の高さは今回調査した中では「ある」「する」「言う」と並んでいる。このことは，関西地方や福岡市での傾向と共通している。

平塚2009では，「違うクナイ」の容認度の高さについて，関西方言で「チャウクテ」「チャウカッタ」と変化する「チャウ」が影響する可能性を考慮しつつも，福岡市方言でも「違うクナイ」の容認度が高いことから，むしろ「違う」という語が動詞ではあるが状態性の意味を持つことが，「クナイ」の容認度の高さに関与していると分析している。

しかし，「クナイ」をあまり用いない地域での「チガクナイ」の容認度の高さを考えると，単に状態性の意味があるというだけでなく，「違う」という語の形容詞型の活用との親和性が高さが，同意要求の「クナイ」の容認度の高さにも強く影響していると考えられる。

また，今回は同意要求の場合のみを調査したが，一般に「チガクナイ」は平叙文でも用いられることがある。秋田県や山形県では，同意要求ではなく平叙文の「違う」の否定形として「チガウクナイ」を用いる可能性はないのだろうか。今後さらなる調査が必要である。

７．終わりに

本稿では，主として若年層に見られる動詞などにつく「クナイ」という同意要求の形式が，

12）福島県出身者は，友人に対しては「チガクナイ」，フォーマルには「チガワナイ」を使うと回答している。

既に指摘されている関西地方や福岡市などとは別に，東北地方の秋田県・山形県において用いられていることを指摘した。また，この形式の容認度に，方言の影響がある可能性があることも示した。しかし，山形県の使用状況については，調査が行き届かなかったところがある。また，語の意味による違いなどについても考察がいたらなかった。今後の課題としたい。

参考文献

秋田県教育委員会編（2000）『秋田のことば』（無明舎出版）
北本洋子（1995）「<研究ノート>日本語動詞『違う』の形容詞型活用の実態」『横浜女子短期大学研究紀要』10巻　pp. 135-144　横浜女子短期大学
佐藤武義・前田富祺ら編（2014）『日本語大辞典』大修館書店
高木千恵（2009）「関西若年層の用いる同意要求の文末形式クナイについて」『日本語の研究』第５巻４号　pp.1-14　日本語学会
平塚雄亮（2009）「動詞肯定形に接続する同意要求表現クナイ（カ）」『日本語文法』９巻１号　pp.71-87　日本語文法学会
松丸真大（2002）「秋田県由利方言の用言の活用」真田真治編『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究』2, pp.181-194